

氏 名 金 セツピョル

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1810 号

学位授与の日付 平成28年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 日本社会の自然葬に関する民族誌的研究
—NPO 法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に—

論文審査委員 主 査 准教授 新免 光比呂
教授 出口 正之
准教授 山田 慎也
名誉教授 中牧 弘允 国立民族学博物館
教授 村上 興匡 大正大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本研究は、NPO 法人「葬送の自由をすすめる会」（以下、「すすめる会」）を中心に、自然葬が社会運動として現れたことに注目し、明治以降の近代日本で形成された制度と宗教を超えようとする葬送儀礼がいかにかに生成し、人々はどのように死と向き合っていくかを明らかにするものである。

近代日本に成立した葬送儀礼、つまり「家」を中心に、火葬した遺骨を墓石の下に埋葬し、檀那寺のもとで供養と祭祀を重ねていく形式に大きな変化が生じている。その根底には家族構造の変化、仏教離れ等の現象があり、その結果、墓の購入や継承問題、そして新たな追悼のあり方が浮上しているとされてきた。これに対して「すすめる会」は、墓の購入と継承問題よりは、既存の葬送儀礼のあり方に正面から異議を唱え、自然葬、つまり粉末化した焼骨を散布する葬法と、それに付随する諸儀礼の実施と普及に携わってきた。自然葬は、関連する法律の「対象外」という解釈で行われており、「墓に入る・入れる」という通念に疑問を投げかける手段として位置づけられる。

従来、自然葬のような新しい葬送儀礼の登場は、家制度の変容や個人化を表す現象として説明されてきた。しかし、このような枠組みでは法律に異議を呈する「すすめる会」と、その結晶である自然葬を把握するには不十分であると考え、本稿では「すすめる会」を社会運動として捉えた。自然葬が社会運動であることを意識した研究も存在するが、自然葬の儀礼形成過程や実践の多様性は十分に描かれてこなかった。また、「新しい」側面だけが注目され、自然葬が大きな抵抗もなく定着しているような印象を与えている。そこで本研究は、自然葬の儀礼形態を形成していく様子や多様な自然葬の実践を丹念に追ひ、民族誌的に記述した。そこでは、一般化された葬送儀礼の型が見えにくくなった現代社会において、葬送儀礼は社会文化的文脈におかれた個々人の意味付与によって形成されるものであるという認識が前提となる。

第 1 部「社会運動としての自然葬」では、「すすめる会」における自然葬が社会運動の一環として形成されてきたことを明らかにした。

第 1 章「『葬送の自由をすすめる会』の理念」では、「すすめる会」は死後の自己決定権、エコロジズム、死後観としての自然回帰思想を理念としていること、そして「新しい社会運動」の潮流と歩調を合わせる運動であることを明らかにした。「すすめる会」は、葬送儀礼という生活世界の領域に、家制度と結びついた国家や、市場原理に基づく商業主義が過度に介入してくることに対抗している。そして「家」や国家など近代的な共同体の成員ではなく、死後の自己決定権をもち、死に方を自覚的に追及・選択する「市民」としての死の迎え方を提示した。そこで示された自然葬の意味は、「葬送の自由」という死に方の実現と、環境に有益であるということであった。環境に有益という意味は死後観としての自然回帰思想と結びつき、人々を吸引していった。

第 2 章「理念としての自然葬」では、理念が儀礼にそのまま投影され、自然葬は既存の墓に対抗する形で構成されてきたことを論じた。「すすめる会」では、遺灰を全部撒いて墓をつくらない、「大自然の中」と称される広くて抽象的な空間に撒く、散骨した場所を訪れないなどの儀礼形態が形成されている。また、「家」と寺の圧力を拒否し、形式にこだわらない告别・追悼行為をすることが望ましいとされる。

第 2 部「慣習とせめぎあう自然葬」では、社会運動として形成された自然葬が、会員たちによってどのように意味づけられ、実践されるかを提示している。

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

第 3 章「創出される自然葬の意味」では、会員たちが「すすめる会」の理念を、戦争、学生運動、「家」に従属的な女性像の強要などの自分の経験の上で再解釈し自然葬の意味を創出しながら死に向き合っていることを明らかにした。しかし、理念として分類できない意味づけもあり、自然葬は多種多様な意味の総体であることを究明した。

第 4 章「実践としての自然葬」では、理念と慣習の間で葛藤する会員たちによって、多様な形で自然葬が実践されたり、霧散されたりしている現状を描いた。それは、遺骨に霊魂が宿るという死後観を拒否しながらも、依然として遺骨が死者の依り代として認識されているという、理念と慣習のズレから発生するものであった。

第 3 部「ダイナミズムのなかの自然葬」では、自然葬をめぐる「すすめる会」の内外部の状況の変化によって自然葬の意味が再編されている現状について述べている。

第 5 章「日本社会の変化と自然葬の意味再編」では、日本社会で散骨が広まる一方、会の内部では「葬送の自由」の実現としての自然葬の意味が衰退していることを述べた。このような状況に中心メンバーたちは、社会運動としての路線を強調する方向に突き進んだ。しかそのあまり、「すすめる会」の理念に必ずしも分類できない自然葬の意味が否定されることになり、葛藤が深まっていった。

第 6 章「会長交代と新たな問いかけ」では、このような「すすめる会」の制度化とも言える傾向が、合理主義的な立場から、火葬場から遺骨を受け取らないゼロ葬を提唱した新会長への否定をもたらしたことを述べた。ゼロ葬の登場は、自然葬の意味を再考させるきっかけとなった。

結論では、本稿の意義や限界、展望についてまとめた。

1、現代日本社会において、血縁・地縁に代わる共同性を提示する合葬墓・桜葬や、生態主義的な永続性を提示する樹木葬と並んで、「市民」としての死に方を提示する「すすめる会」の自然葬の実態を明らかにした。会員には敗戦と戦後の民主化、ならびに大衆消費社会化の時代を生きるなかで新しい価値観を内面化した人たちが多く、このような人たちが「すすめる会」の自然葬に呼応している。

2、自然葬の具体的な形成過程を明らかにした。「すすめる会」は、墓を中心とした葬送儀礼を意識的に拒否し、自然葬の儀礼形態を構成してきた。自然葬は、墓の継承問題、あるいは「簡素化」という言葉でまとめられるものではない。自然葬において、ある儀礼行為を「行わない」ことは、ある儀礼行為を「行う」と同等の重さをもつ。本稿では、このような議論を通して、個人が能動的に死を意味づけ、葬送儀礼を築き上げていく中で、「行わない」儀礼に注目する必要性を提示した。

3、慣習と新しい理念の間で葛藤しながら死に方を模索する人々の姿と多様な自然葬実践を浮き彫りにした。遺骨-霊魂認識における理念と慣習のズレは、会員たちに内面的な葛藤をもたらし、周囲から自然葬を反対される原因にもなっていた。人間の営みのなかで最も変わりにくいと言われる葬送儀礼は、矛盾と葛藤を伴いながら変化しているのである。

ただ、本稿では、自然葬の制度化とゼロ葬の登場で起きている混乱が、実は新しい死に方の浮上である可能性を提起しながらも、それを後付ける体系的なデータの収集には至らなかった。今後、ゼロ葬を支持する人たちに調査を広げる必要がある。また、従来の墓を中心とした葬送儀礼の変化様相にも目を向け、自然葬をより広い日本社会の文脈に位置付けなければならない。将来的には、韓国、イギリスなどで台頭した新しい葬送儀礼に関する通文化的研究を通して、個人の生き方の再考が要請される現代社会において、人々がどのように死と向き合っていくかを究明していきたい。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

博士論文の審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、既存の葬送儀礼のあり方に異議を唱え、自然葬（粉末化した焼骨を海や山などに散布する葬法）の理念と実践の普及を担ってきたNPO法人「葬送の自由をすすめる会」（以下「すすめる会」）のなかに社会運動としての性格を見出し、その社会運動的な理念にもとづいて新しい葬送としての自然葬が成立する過程と、それに携わる人々による運動理念の受容と主体的な解釈による意味再編のダイナミクスを明らかにするものである。申請者は、「すすめる会」とその自然葬への参与観察にもとづいて、民族誌的に詳細な記述の上で、自然葬の実態について考察を行っている。

本論文の構成は、序論、本論、結論からなる。

本論は大きく3部に分かれ、第1部では「すすめる会」が掲げ、実践してきた自然葬の社会運動としての理念とその理想的な実施形態、第2部では自然葬に対して会員たち自身によって与えられた意味づけとその具体的な実施状況、第3部では「すすめる会」をとりまく内外の変化によって、社会運動としての自然葬の意味が再編されつつある現状が、それぞれの主題として分析されている。

本論各部には、それぞれ2章があてられている。第1章では、各人が自由な葬送形態を選べることを主張してきた「すすめる会」の沿革と理念が示されている。第2章では、理想的な「すすめる会」の自然葬の特徴を遺体処理、社会関係、追悼と供養の三つの観点から検討し、第4章で実際の自然葬実施の多様性を分析するための前提としている。第3章では、自然葬を実施した会員たちへのインタビューと参与観察から得られた語りを通して、会員たちがそれぞれの経験から「すすめる会」の理念を解釈して自然葬の個別の意味を見出してきたことが丹念に描かれている。第4章では、実際の自然葬の多様性が、第2章で提示された遺体処理、社会関係、追悼と供養の三つの観点に即して具体的に描かれ、理念と慣習との間に揺れる自然葬実施者の実態が詳細に記述されている。第5章では、散骨の一般化によって「葬送の自由」の実現としての自然葬の意味が衰退するなかで、社会運動路線を強調する中心メンバーと現場で対応する事務職員、自然葬を実際に行う会員との間で生じた齟齬を描き、社会運動体としての組織が直面する課題を分析している。第6章では、「すすめる会」の合理化をはかって、火葬場で遺骨を引き取らない0（ゼロ）葬を主張した新会長と、これに反対する旧理事会との対立を通して、新たな葬送に対する社会の認識の変化を明らかにしている。

結論で、葬送は慣習の影響を大きく受けながら、社会的、文化的な文脈のなかで個々人が主体的に付与する意味づけによって変化していくことが述べられている。

本論文は以下の諸点で高く評価できる。

申請者は自然葬という葬送を実施する集団に密接に参与することにより、葬送の個人化によって調査がより困難になっている自然葬の実践を、焼骨の粉末化、散骨などの遺体処理、意志決定と契約などの社会関係、告別や追悼など人々の具体的な行為に即して、詳細な民族誌的研究を生み出すことができている。一般に自然葬は流行現象とみなされ、既知のものにとらえられがちだが、実際の自然葬の実施主体、実施状況などに関する具体的な分析は、葬送研究の分野に対する大きな貢献である。

従来は葬送研究では、新しい葬送の出現は家制度の変容や私化、世俗化によるという説明がしばしば行われてきたが、本論文は、会員たちによる自然葬の実践のなかで「すすめる会」の理念が受容されると同時に、彼ら自身による意味の再編が生じていることを具体的に

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

に示しており、新たな葬送は社会的、文化的要因に規定されながら個々人による意味付与によって形成されるという認識を深めたことも大きな成果である。

一方、自然葬を社会運動としてとらえた研究においては、その儀礼の形成過程や自然葬の実践の多様性が十分に描かれていなかったこと、また自然葬が大きな抵抗もなく定着しているような印象を与えていることを申請者は指摘しているが、それを踏まえて申請者は多くのインフォーマントとの交流を通じて、自然葬実施者たちの内面の葛藤にまで視野を広げていることも高く評価できる。

さらに本論で行われている従来の民族誌的な記述にとどまらず、後半部では現代社会において大きな役割を果たすようになったNPOについての新しい民族誌的研究への可能性を示している。とりわけ、指導方針の転換を図る新会長とこれに反対する旧理事たちとの対立に関わる事情が詳しく述べられており、これは理念を追求する団体が合理主義的経営へと転換しはじめた際に生じたと思われる軋轢の記録と分析として論文にいつそう深い意義を与えている。

最後に、叙述が丁寧で過不足のない筆致で貫かれていることは、成果発表の精確な表現に配慮がなされている証しであり、申請者が研究者としての資質を具えていることを示している。加えて、インタビューを中心とする参与観察において多くの事実を掘り起こしたことからうかがえるように、濃密な人間関係を構築できる優れたコミュニケーション能力も特筆に価する。

ただし、本論文が「日本社会の自然葬に関する民族誌的研究」というタイトルを掲げているにもかかわらず、考察が「すすめる会」に集中していることは、本来目指していたはずの比較の視点が十分とはいえないことを示している。しかし、これは本論文の学術的な意義を損なうものではなく、本論文ですぐれた調査能力を示している申請者は、諸外国における自然葬と類似した葬送形態へ研究対象を広げることで、この課題を克服していくものと期待できる。

本論文は、堅実な作業とよく練り上げられた立論に基づいて構築されており、審査委員は一致して本論文を優れた業績であると評価し、博士学位授与にふさわしいと判断する。